

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全33回--3

2021年10月

写者

小原靖夫

第3回・語られた、聴いた「大いなる救い」

第2章①節から④節 大いなる救い

①だから、私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。

そうでないと、押し流されてしまいます。

②もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違反や不従順が当然な罰を受けたとするならば、

③まして私たちは、これほど大きな救いに対してむとんちゃくでいて、どうして罰を逃れることができます。この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によって私たちに確かなものとして示され、

④更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。

それでは、今日はヘブライ人への手紙の2章の1節から4節を中心に、ご一緒に学びの時を持ちたいと思います。

先ず文章そのもの、御言葉の構造としては、1章が1節から4節まで「神は御子によって語られた」という形で序説を述べたわけですが、それに丁度対応する形で2章もまた、1節から4節までのところで「大いなる救い」という小さなタイトルで、1章の1節から4節の部分を受けて、勧告が展開されようとしていると見て頂いてよいと思います。

その意味ではこの「手紙」と呼ばれている文章は、綿密に練り上げられた形をとった一つの論文的なものであると見ることもできるわけですが、特に今日のこのところでは「大いなる救い」という見出しに注目をしながら、一つ一つの言葉を味わってみたいと思うわけです。

先ず、1章の中では、「神は—この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました」という言葉で序論を述べたわけですが、この「語られた」という言葉はギリシャ語ではラレオーという言葉です。このラレオーはただ単に「語る」というような意味ではなく、「吸収されていく、受け止められていく」あるいは「聴くことを前提として語る」と、そのような意味を持った言葉なのです。ですから、「語られた」という言葉は同時に「聴かれた、受け止められた」という言葉と結合しないと一つの意味を持ってこない言葉であると言ってよいと思います。78

つまり、神が語られたことは、現実の中で具体化したとか、あるいは受け止められ、それに対して応答があったというように捉えていく、そういう内容を持った言葉ですから、私たちは注意して受け止めていこうじゃないか、神の言葉を聴いていこうじゃないかということがこの部分では大事なポイントになっているのです。(語られ、聴かれた。応答せねばならない)

第1節

「だから私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます」

「押し流される (パラレッオー)」とは

「だから、私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。」という一節の言葉は—神が語られた、既に神の言葉はあなた方の中にある。だから、空しく神の言葉を待つのではなく、語られた言葉に対して注意深くこれを「受け止めていかなければなりません」、「聴いていかなければなりません」、「応答していかなければなりません」—というように読んでいってよいと思います。

今日のところは少し短い文ですから、各節に書かれている言葉に注意しながら各節で語られている箇所を味わってみようと思うのです。

続けて、「そうでないと、押し流されてしまいます」というように書かれています。この「押し流される」という言葉、これはパラレッオーという言葉なのですが、この言葉は実はただ「流れて行く」というのとは違って、航海で使われている用語なのです。

「船を操舵していく時に使われる言葉」で、例えば舵を、寄るべき港の目的地にきちんと合わせて操っていても、流れがあるとその流れによって次第々々にその方向から外れていってしまう。自分ではその目的地に向かって進んでいると信じていながら、外的な条件によって目的地から外れて行ってしまふ。そして遂にはその目標の港に着くことができなくなってしまう、というような時に「押し流される」(パラレッオー)という言葉が使われているわけです。

従って「押し流されてしまふ」ということは、神様、神様と言葉で言い、頭で思っているも、現実の生活の中では、段々と真実への信念が喪失されてしまひ、他のものに関心が移ってしまうことになる、だから気を付けなさいというわけです。

私たちは神を礼拝する、神の言葉に耳を傾ける、神によって生かされているという言葉をしばしば使います。

そして現実的にイエスがお生まれになった時代、あるいは初代教会の時代にも、ユダヤ人たちは「私たちは神によって選ばれた神の民である」ということを言い続けてきたわけです。確かに彼らは神によって選ばれた。

神は失敗なさるお方ではないから、神によって選ばれた選びは有効である。しかもそれは決定的に神の救いにあずかることのできる選びであった。

しかし、そのことだけを彼らが金科玉条のように受け止めているだけで、自分たちが、今その方向に向かっているかどうか、現実の歴史の中で確認しないでいると、目的地に向かっているのだと思いながら、とんでもないところを航海していることになるのです。

「それが実はイスラエルの人々がヤハウエを認められなかった理由であって、つまりはイエスをキリストと認められなかった理由なのだ」ということになるわけです。p80

彼らは決して、自分たちはイエスに抵抗して生きているとは思っていません。ただ自分たちこそがメシアを待っている純粋な民であって、自分たちの中にこそ、メシヤは来たるべきお方として来るのだ、だから異邦人たちや神の言葉に忠実でない人々の中に、神の子がお住まいになる働きかけをなさるといふことはあってはならない、あり得ないことだと考えたわけです。イエスが飼料桶で生まれたことも気に入らない、ガリラヤで伝道をはじめたことも気に入らない、自分たちがここだと思っている「港」ではないのだからと彼らは言うのです。

そういう意味でイエスはキリストではないと彼らは思った、ということなのです。ですから別に「イエスがキリストではないと思ったこと」が、彼らが徹底的に神の選びに対して抵抗したことで何でもなかったのです。ただ彼らは、自分たちは「ここが安全な港なのだ」と考えていたその最終的な目的地が、この世の波に流されてずれてしまっていた。本来着くべき港ではない港が、自分たちが着くべき港だと判断してしまつたところに誤りがあったわけで、そういう一つの背景をしっかりと踏まえながら、ヘブライの人々に向かってこの手紙は書かれているわけです。

「あなたがたはイエス・キリストの言葉に注意を払い続け、神が語られた言葉に徹底的に関心を寄せ、しっかりそれを見つめて生きていかないと押し流されて、とんでもないところに行ってしまう」と。

これは当時のヘブライの人々、ユダヤ人に対して語った言葉であると同時に、今日の私たちに向かって語りかけられている言葉であると思います。

あなた方の信仰が着くべき港にと向かって進んでいるのか、しっかり歩みを進めているのか。あるいは、目をこらし着くべき港を見つめて船を操ることをしないで、こうなるはずだと（自分勝手に）考えて、時に任せ、流れに任せて過ごしているならば、神が選んでくださった「選びの究極の『港』には着けません」ということがここでははっきりと言われているのです。82{こうなるはずだと自分勝手に考えて}—写者解釈 アーメン

第2節

「もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違反や不従順が当然な罰を受けたとするならば」

ここからは「天使」と「神の子」の対比が始まります。丁度、1章の1節2節のあたりでも「天使」がとりあげられておりますが、ここでは天使という言葉は直接は出て来ませんが、預言者とか、あるいは他の人々によって、神は間接的に語られたという形で記され、これが仲介者だったのです。

けれども、今の時代には御子ご自身がお語りになるのです。

この仲介した者を天使という言葉でまとめて呼んでいるわけで、例えばモーセが十戒を受けたのも、稲妻とかさまざまなものによって彼がその言葉を受けたわけですから、これも天使の助けによって神の言葉を聴いた。(神から)直接聴いたものではないという理解を、この著者はしていると考えてよいと思います。

「もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違反や不従順が当然な罰を受けたとするならば」(私たちの現実を問われている)

とありますが、ここで「もし～～ならば」という大変大事な文型が使われているわけです。この事柄の背景には、やはり私たち一人一人が、神が語られた事柄に対して、私たちの前に起こっている現実をどう捉え、受け止めているのかが問われているわけです。いわゆる仮定形ではないのです。

「もし、万が一こういうことがこれから起こったならば」ではなく

「もし、あなたがたの中に、現実としてこういう事柄が明らかであるならば」ということであって、「既にこの事は明確に起こっている」と彼は言おうとしているわけです。あなたがたが段々押し流されてしまっていると言いましたけれども、押し流されてしまっている部分については、この少し先の3章の12節のところに、彼らの現状としてこんな言葉が書かれているのです。

「兄弟たち、あなたがたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて、生ける神から離れてしまう者がないように注意しなさい」

言い換えると、あなたがたの中に、そのことが現実に関わりかけています。

いや、そのようになった人がいますと言おうとしているのです。

あるいは、もし少し先になります6章の4節からのところに、

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、神のすばらしい言葉と来たるべき世の力とを体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。

土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます」

神がくださった恵みの雨に対して、どう応答をしているかが、ここでは大事な問題なのです。良い味を实らせるように、耕す人々に役立って農作物を豊かに実らすなら祝福を受け

るけれども、それをいいことにして、やりたい放題やって、自分の思いを遂げようとして茨やあざみを生えさせたならば、それは焼き払われてしまう土地になるのです、祝福を受けられないのです、罰を受けるのです、と語っているわけです。84

キリスト教信仰の中で「罰」の概念はあまり普段は使わないのです。神は私たちを祝してくださるが、罰するお方ではないという考え方が強くありますが、ヘブライ人に向かって語るときには「神が、そうでないものには、そうでないものとしての報いを当然与えられる」という「救いと滅び」あるいは「恵みと罰」というような言葉で表現されています。彼らは自分自身の生活をそのような形で方向づけていますので、そういう言葉がたくさん出てきます。

私たちが普段、福音書を読んで感じる感じ方とは多少違った意味合いの言葉が用いられていることは事実です。しかし、旧約の中にはそういう「呪い」もたくさん出て来るわけで、正にそういう背景をもって神との出会いをしているヘブライの人に向かって語るわけですから、そういうことになるのです。

今のところも同じように「もし、あなたがたが神に正しく応答しているならば豊かな祝福を受けるけれども、もし、神に正しく応えられないならば、呪われて焼かれてしまいます」というような言葉で語られているわけです。「もし～～ならばこうなりますよ」ということが、実は現実的に今、起こっているのです。ですから大変大事な問題として語っていかうとしているわけです。85

第3節

「まして私たちは、これほど大きな救いに対してむとんちゃくでいて、どうして罰を逃れることができましょう。この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によって私たちに確かなものとして示され」

言い換えると、天使たちが語りました、天使たちが告げました、そして、その事柄が歴史の中で現実になりました。しかし、それよりもっと確かなお方、神御自身が語られました。

この「語られました」（ラレオー）という言葉は同時に「神が御子によって語られた言葉」で「福音である」と記されているわけです。神が私たちに与えてくださった救いという形で語っているわけで、神が語られた言葉、それは正に福音そのものであったわけですから、ここから「その福音と律法ということが対照的に出てくるわけ」なのです。

天使たちがあなたがたに向かって語った言葉、それは「律法」である。そしてその律法は、それなりに意味を持っていた。この律法のもっている意味については、パウロがガラテヤの信徒への手紙の中で書いている。これも同じようにガラテヤにあったディアスポラ（外国に住んでいるユダヤ人キリスト者）に対して語った言葉ですから、その意味ではヘブライ人を想定して書いているわけですが、このガラテヤ書の3章19節のところに出ているのです。そこには

「では、律法とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束の場合、神は一人で事を運ばれたのです」と書かれているのです。⁸⁶

言い換えると、天使たちを通して語られた律法とは、いろいろな人々の手を通して、あなたの方に対して与えられていったけれども、イエスは神の御子であり、直接的に語られたので、もはや仲介者は必要なくなったのだと言っているのです。

だからイエス御自身を見、イエス御自身の業を確かめ、イエス御自身に従って行くなれば、当然その神の言葉、すなわち福音に到達できるのです。律法というまどろっこしい方法を通して間接的に神と関わるのではなく、直接関わるチャンスが与えられているのですとパウロは語っているわけです。

従って直接神の御子が現れて語られるまでは、中間的な存在として天使が語り、律法が与えられて、神と出会う一つの筋道があなた方には提供されていたのです。

しかし、律法は神の御子が現れるまでの限定された役割を担っていたのです、というように捉えて頂いてよいと思います。

「律法」はその意味で時が流れ、時代が移って行くと、その時その時代に応じて多少の内容の変遷をして来るのです。いろいろな人々が加わるにつれて、そういう人々が適応して行いけるようにどんどん数が増えました。⁸⁷

ところが福音は誰が聞こうと、どのような人々が出会おうと、どんな時代になろうと御子お一人が具体的にご自身で語られた、ただ一つの言葉で十分なのです。だから、天使はたくさん語ったかもしれないけれども、イエスは一つだけ語られた。真理の言葉だけを語られたのだと取ることもできるのです。

そういう意味で、「天使の語った言葉」、「神の子が語った福音」という形で整理されていますが、その内容は多岐にわたっているのです。

例えば、過去と現在という形で捉えると、そのようなキリストの言葉に従わない者は過去に生きる者であって、救いからは遠いのだということになります。

あるいは多くの言葉、すなわち律法に対して心を向け、それによって救われようと思う者はたくさんのごことをしなければならぬが、キリストの福音によって生きようとする者はたった一言「イエスは主である」と告白すればそれでよろしい、多くのことをごたごた考える必要は全くないのです、ということにもなるのです。

律法はあなたがたを神の方に導く導き手であって、それ自体は不完全なものだけれど、キリスト・イエスの御言葉はそれだけであなたがたを救う完全なものなのです。というような意味もこの中に含まれていると言ってよいと思います。

「大いなる救い」

そういう神の言葉と天使の言葉の対比を述べながら、神の言葉そのものこそが完全にあなたがたを救うものであり、神の国に招く唯一の真理である。そしてそれは現在、私たちに与えられている恵みであると語っているわけです。「大いなる救い」というタイトルの「大いなる」という部分はそこにかかっているのだと思います。一つであり、一つであるが完全であり、絶対である救い、そういうものが「大いなる救い」と考えてよいと思います。

2節で言われている律法が、あなたがたに対して約束した事柄が事実あなたがたの中で実を結びつつあるならば、神が語られた唯一の言葉、それはあなたがたに対して確かな働きをもち救うことであるのだから、その神の御言葉、働きかけに対して無頓着でいてよいのでしょうか。（無頓着の意味、その戒めはグサリと私の胸に刺さりました）

この無頓着というのは先程言いました航海用語のパラレオー（押し流される）という言葉と結びつきながら語られているわけです。注目し続けなくていいのだろうか、その事柄に対して関心を寄せ続けなくていいのだろうか、他のことを考えていていいのだろうか、とても大切な問題を私たちに提供してくれているように思います。

結局あなたがたはこの世の力やさまざまな思いによって、「押し流されてしまわないように」、キリスト・イエスによって聞かされた神の言葉に注意を払い続けて行かねばなりません、集中して生きて行かねばなりません、ということがここで述べられています。それから次の言葉に入っていくわけです。

「もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違反や不従順が当然の報い、即ち罰を受けたとするならば」

ということになります。そういうことを認めるならば、即ち、神の選民であることを認めているならば、そうするなら「まして私たちが」というこの第3節の「まして」という言葉が、非常に大きな意味を持って来るのです。

あなたがたが自分を選民だと自認するならば、それ以上に、キリストが語ってくださった神の大きな救い、破格な救い、しかもあなたがたの努力によらないキリスト・イエスによって完全に遂行された救いに対して、無頓着でいられるはずがないと言っています。

神の言葉が真実であると律法の中で認識するならば、ましてや、御子ご自身が語られた言葉に対して無頓着であろうはずがないではないか、と言っているわけです。

この「無頓着」という言葉は、ギリシャ語でアメレオーという言葉が使われているわけですが、この言葉はある事柄に対して真剣に考えないで、適当な応答をしていく姿、人からものを言われた時に、その事柄を真面目に考えないで適当にそれに応じていく姿をここでは無頓着と訳しているのです。ですから神から問いかけられた時に、その問いに対して真剣に自分の全身全霊を傾けて応答しないで、適当な答えですり抜けていく生き方、それが無頓着と書かれているのです。

だから一般に私たちが考える無頓着とは大分違うわけです。神の言葉に対してどれだけ集中して自分自身の歩みを方向づけていますか、どれだけ真剣に神の問いに応えようとしていますか。ここではあくまでも、イニシアティブをとっているのは「神」です。

あなたがたの願いがどれだけ効かれたかなど全然書いてないのです。「神」が語ったことがどれだけ真実になったかということが書いてあるのです。あなたがたの希望がどれだけ意味を持ったかなどと書いてないのです。神が語られた言葉がどれだけ真実とされているのか、と問われているのです。つまり「当時の選民思想から出発したものの考え方と、このヘブライ人への手紙の著者の考え方とは起点が全然逆なのです」⁹⁰。

当時のユダヤ人は、選民である我々は神によってどれだけ幸せになったか、どれだけ祝福されたかということを何時でも問題にしていました。それに対してヘブライ人への手紙の著者は、神が語られた言葉に対してどれだけ真剣であり、どれだけ忠実であったのかと問いかけているわけです。

神がどうかではなく、神は完全なものを語られたのだが、その完全をあなたがたは完全に生きたのか、あるいは不完全で曖昧にしているのか、この言葉でいうならば「無頓着」だったのか、適当に応えてきたのか、ということが問われているわけです。

信仰生活は、そういう意味では、このヘブライ人への手紙を読む限りにおいては真剣勝負なのです。私の今日は「神によってのみ」位置づけられ、方向づけられ、意味を持っている、もし私が神の言葉を聴かない時が一時でもあろうものなら、そのことによって私たちは滅びる、そういう厳しさをもってこの言葉は語られていると言ってよいのです。⁹⁰

しかも「イエスをキリストと信じること」は、迫害が起こっている時代の中においては何時でも滅びと背中あわせです。神を信じたがゆえに、この世の力によって滅ぼされるのか、あるいは、この世と妥協したために、神によって滅ぼされるのかのどちらの滅びを、あなた方は選ぶのですかという問いであると考えてもよいのです。

「滅びを選び取る」ということは、ちょっと私たちには考えつかないのです。「救いを選び取る」ということはいつでもやっていますが。

けれども、ヘブライ人への手紙の著者は「あなた方が滅びと考えているのは一体どういうことなのだ」と逆に問いかけています。

うまく世渡りをしていくことが生き残ることであって、滅びないことだと考えているのか。それならば、それは逆に決定的な滅びをもたらしているんだぞ、自分が自分を滅ぼしているんだぞ、ということを語ろうとしているわけです。そんな意味内容を私たちはこの短い箇所の中から大変厳しく問われているように思います。（ああ、松山先生！）

3節の後半の方で、

「この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によって

私たちに確かなものとして示され、④さらに神もまた」と4節につながっていくわけですが、これがこの「信仰をもって生きることの原点」ですね。それがどこにあるのか、それは、現在私たちが生きていることの中に生かされていなければ意味がないのです。

かつてあの時、ということを経る旗印に掲げて立ち上がったとしても、今あなたの中に救いが成就されていないならば、それは意味をもっていません。これは正に当時のユダヤ人に対する徹底的な糾弾なのです。私たちは選民だという、その選民であるという発想はどこにあるのかというと、かつて神が私たちを選ばれたということなのです。

今、神が選んでくださっているという発想ではないのです。選ばれた者の子孫であるから、私もまた選ばれた者であるという選びが現在に生きていて、私が神に応答することによって成り立っていることではない。

過去において選ばれたということをいっているわけですから、彼らの信仰の歩みは過去に思いを向けることでしかない、今、自分を生かし動かす力ではない。だから、過去に選ばれた私たちが、今ずれてしまった時代の中に置かれているのだから、過去に選んだ神に責任があります、というのがユダヤ人の発想なのです。

それは私たちの信仰の中にもあるわけで、「救ってやるから」と言って救ったんだから救った以上責任がありますよ、という祈り方を私たちは色々な時にするわけです。私が特に初めから、救ってくださいと、言っているわけでもないのに、救ってやるとおっしゃって救ってくださったのであり、私が「救ってください」とお願いしたのではないのだから、私には何の責任もありません。あなたが救ったのだから、救った以上自分の責任を果たして、私を天国に連れて行ってください、というような傲慢な祈りが出てきます。(自分を笑うほかありません)

ところが、救いという事柄は過去じゃないのです。「今、私はこの時代の中に生かされていながら、この時代の者としてではなく、神の歴史の中に生きる者として、この時代に立てられているのです。神から遣わされた者としてこの世にいるのです」という認識があるかどうかという問題なのです。⁹²

主の日の礼拝が終わって1週間の歩みに帰って行く時に、私たちは多かれ少なかれ教会から遣わされてこの世に出る、派遣されていく。ところが、派遣されているという意識がどこまであるのか？ 遣わされているのではなくて、この世にあるのが普通であって、たまたま日曜日には教会に出かけていく、私たちの在るべきところはこの世であって、神のところへ日曜日だけは静養に行き、保養に行く。そういうことで出かけて行くのだというような主との関わりがあるならば、その人の救いは、現在の生き生きとした救いではありません。過去に自分の根拠を置き、現在は神と離れたところにいることを平然と認めているのだということになるのです。(痛いところを突かれました)

結局、神のお言葉が私たちの救いになるのは、かつて語られた「あの言葉が、あの時、あのところで」救いになったということではないのです。今、語られている神の言葉が、

今、私を救っている、ということではなければ救いは力をもちません。今、神はこの私を赦し、この私を支え、この私を生かしてくださっている。だから私は今を生きているのだ、ということではなければ意味をもたないことになるのです。(アーメン、アーメン)

そういう意味では、私たちは直接的に、しかも徹底的に主を通して語られたその言葉、即ちそれが福音であるわけですが、その言葉を本当に聴くことなく、受け止めることなしには、信仰に生きることはできないのだということになるわけです。⁹³

ですから私たちは絶えず、今、主が語っていらっしゃる言葉に関心を向け、注意をし、全力を傾けてそれを聴いていく、そしてそれに応答していくことがなければ、信仰は信仰にならない。救いは救いにならない。ということをごここでは語っているのだと思います。

(主は語り続けられておられる)

だからこれは非常に厳しいのです。あなたは語るのではなく、聴くのですという、あえて言えば、そのことをヘブライ人への手紙の著者は呼びかけているわけです。

「私たちはどこまで聴こうとして生きているのか、聴いて応えようとして生きているのが信仰の問題として問われている。それは同時に、預言者が神の言葉を受け、様々な時代の中で『神に立ち帰れ!』と叫んだ姿勢と全く同じなのです」。

「神を見上げなさい」

この世の力、この世のことに耳を傾けるな、この世の波風に揉まれている姿に対して、助けて欲しいというような叫びを上げるのではなく、「神を見上げなさい」、よしんば、この世の力に飲み干されるようなことが起ころうとも「神はあなた方を支えられる」。

そして「この世の力にあなたが飲み干されるような現実が起ころうとも」という部分は旧約の中で、特に出エジプトという出来事の中では再三再四出て来るのです。御言葉として神は与えてくださる。紅海の前に立ったイスラエルが、追いかけてくるエジプト軍の力によって飲み干されてしまいそうになる。

その土壇場において神は海を開いて、彼らを渡らせてくださる。そして飲み干すはずであったあのエジプトの大軍隊が神の力によって波に飲み干されてしまって、彼らは滅び、イスラエルは救われるということが起こるわけです。言い換えると、逆転がそこで起こるわけですね。⁹⁵

それはこの世がどう考えようと、誰がどう求めようとそんなこととは全く関係なしに、神が一方的になされた恵みであった。その現実を経験しておきながら、あなたがたはなお、神だけに頼ることに不安を感じて生きている。別な言い方をすれば、「今、あなたがたは満足できる状態だけを必要として生きている。そういう生き方の中には、神との関わりは具体的に、「今」という状態では引き起こされませんよ」、ということが非常に強く語られているのです。(一言なく、心の中が透かされ見通されている)

主が最初に語られ、それを聴いた人々によって私たちの中に確かなものとしてくださった。すべての事柄の原因は神にある。そしてそれが私たちの中で確かなものとされているという現実注目しなければならない、ということ語るわけです。

こうヘブライ人への手紙の中で忠告しながら、この著者はある意味で「押し流された現実」の中でも、いつかよい芽が出るだろう、ということを考えて、主の来臨を待っていると述べているわけです。

ところが既にメシアはおいでになったけれど、彼らには自分たちが描き出している「港」とは違うものだから、あそこには来ていないのだ、と述べているに過ぎない。⁹⁵

そういうものをいくら待ち続けても、メシアの来臨はもうないのです、と極端な形で言っているのです。「主は既においでになった。そしてご自身で語られた。語られたことが実現した。だからあなたがたはその言葉に対して、然りと受け止めるのか、否と排除するのかを明確にしなければならない。『どっちつかずにいてはいけない』という」わけです。

「正にイエスはそのどっちつかずをお許しにならないで、非常に切羽詰まった一つの状況を私たちの前にお示しくくださったのが『あの過越の祭りにおける十字架の問題なのです』もうそこでは十字架につくイエスを私たちがメシアとして信じるか、あるいは十字架についてしまったらおしまいなのだ、だから彼に従うのは止めようとするのか、どちらかしか道はないのです」。

心の中ではイエスに惹かれながらも、現実の力の強さに圧倒されてエマオの道を歩いていた若者たち、彼らはどっちつかずでした。しかしパーセンテージから言えば99%までは「あの方ではやっぱり駄目だ」と思っていました。

しかし、残りの1%が、神の言葉であったゆえに彼らはイエスと出会うことが起こるわけです。現実にはイエスに心を向けている者には、御自分が積極的に近づいて出会ってくださる。それは過去においてどうだったかではなく、いつでも今、あなたの救いなのだということを確認するためなのです。

一緒に十字架につけられていた強盗に向かって、イエスが語られた御言葉も、「あなたは『今日』私と一緒に天国にいます」。

「今なのです、やがてではない、いつかではない、かつてでもないのです」。いま私はあなたと一緒にいます。ですから私たちは神の言葉を今語られている言葉として受け止め、聞き続けていかなければ限り、私たちにとって福音は遠いものだ、ということになってしまうのかもしれない。（ヘブライ人への手紙の著者も松山幸生先生も厳しい語りの中に光を灯して下さっている）

第4節

「更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます」

さて、ここでは、「神が、私たちに対して証しをしてくださった」と書いてあるのです。

証明をしてくださったのは神なのです。私たちではないのです。しかも証しをしてくださった神の自己証言といたらいいでしょうか。最初に主が語られたそのことを、その救いを聴いた人々の証言によって、さまざまな形でその内容が付け加えられ、増幅されていった。

「しるし、不思議な業、様々な奇跡、聖霊の賜物」という言葉で付け加えてくださったものを書き足しているわけです。(神の自己証言 神御自身が私たちに対して証しをしてくださった言葉 (契約) しるしとか、不思議な業とか、様々な奇跡。ここに書かれている言葉は普段教会で使っている言葉とは違いますね。何でこんな言葉が最初に出てくるのかと言うと、これは勿論ヘブライ人に語っているからなのです。

彼らが自分たちの拠り所に行っている申命記の中に出てくる言葉をそのまま使っているのです。申命記の4章34節の中にこの言葉が出てきます。あるいはネヘミヤ記の9章10節に出てきます。神が私たちに、神御自身が働いていらっしゃることを、いろいろな「しるし」や「不思議な業」や「様々な奇跡」を通して示してくださいました。

パロの前で展開された不思議な出来事、それもそうでしょう。荒野を旅して歩いたイスラエルが飢えないでいたこと、渴かないでいたこと、それもそうでしょう。しかも神は、人間を御自分の御心に適うものに変えようとして、そうした事柄を通してイスラエルを「訓練」してくださった。そういうものを全部ひっくるめて、「しるし」とか、「不思議な業」とか、「様々な奇跡」という言葉で表現している。ですから、更にこの内容がどんなものであったかと言えば、旧約聖書をずっと読んでみればいいわけで、神はこんなことなされたということが見えてくるわけです。

神の言葉に従っている者に対する神の勝利、祝福というものは、例えば一人の預言者、エリアという預言者について見れば、烏に養われて暮らしていたことも実際に起こって来るわけです。あるいは、干上がってしまった河の流れの中で、その傍らに暮らしながら、彼は渴くことがなかった、ということも、正に神がなされた不思議な業であるわけで、そういう一つ一つの事柄を私たちが見ていくことは、とても大事なことであるわけです。

それに対して「聖霊の賜物」という言葉で表現されているのは、実は新約聖書の時代になって起こったことなのです。一番集約的な形ではペンテコステの出来事と言ったらいいでしょうか、教会誕生という事柄を捉えて聖霊の賜物という形で語っていると言っていると思います。

この様々な奇跡とか聖霊の賜物というのは、旧約だけではなく、特に新約の中ではイエスのなされた業を様々な奇跡として捉えている部分がたくさんあります。それから実際に聖霊の賜物も、初代キリスト教の間で多く用いられていた言葉だと思います。

キリスト教の長い歴史的伝統をこの言葉は反映させながら、イエス・キリストによって救われたのは、過去に、神の民とされたという、あのスタートラインにあるのではなく、御

霊を送ってくださって清めてくださり、あなたがたをイエス・キリストが直接十字架によって贖い取ってくださったことで救われたものになり、神に従う者になったのですよということを語っています。つまり、神が与えてくださっている恵み、すなわち神により私たち一人一人が救われている上での確認の仕方をこんな形で表現しているわけです。

しかも、これは非キリスト者に対して神を弁証するときに用いられる言葉として、こういう言葉が何度も何度も使われているわけなのです。

キリスト・イエスが私たちに与えてくださったのは、様々な奇跡であり、また聖霊の賜物としての救いを与えてくださり、その力によって生きているのです、ということをよく物語っているとよいと思います。⁹⁹

短い箇所ですけど、そういう意味では大変重要な幾つかのポイントを持ったものであると思います。初めの頃のキリスト教徒たちが、今日新約聖書と私たち呼んでいるその書物をまだ聖書として持っていなかった時代に、そういう福音の内容を何とかして伝えていこう、本当のものとして多くの人々に語っていこうとした時に、先ず第一に、どういう時代に、どういう世界観をもって生きていたのかということを実際にしっかりと知ることは、とても大事なことだろうと思います。

そのことによって彼らの生きざまを知ると同時に、それを私たちが共有する。その事柄に共感をもって、自分の生活の中に再構築していく。そういう方法によらなければ、この新約聖書と呼ばれる聖書が私たちに与えられていた以前の彼らを、捉えていくことはできないと思います。

彼らのことは文書として残されていませんから、結局このメッセージの中心は、何度も申しますように、「語られた、そして聴いた」という二つの言葉の「緊張関係」によって、たえず神との関係を捉えていく、そういう方法でこの手紙が書き続けられているのだと言ってよいと思います。

「神によって語られ、神によって聴かされたそのビジョンを、喪失しないで生きていくための大きな救い」、神がなされたこの業に、絶えず目を見開き注目しながら一步一步を進んでいかなければいけないのではないか。

本当にあなたがたが、「救い」という、神が与えてくださった大きなビジョンを、しっかり自分たちの中に構築して、そのように生き始めていかない限り、福音からは縁遠いものになります。言い換えれば「押し流されてしまいます」ということを語っているわけです。

もっとも既にキリストによって与えられたものですから、「再構築」と言ってもいいでしょうし、「回復」と言ってもいいでしょうけれども。¹⁰⁰

神の絶対的な救いから、私たちを押し流していく潮の流れ、向かい風の力、それが私たちを取り巻いています。例えば「近代化」とか「合理主義」とか、あるいは様々な言葉で言われている今日的な発想の中で起こってくる「幸福論とか平和論」とかというようなものが一つ一つ、神の方向に向かって進んでいこうとする私たちの船旅の航路を押し流して、変更させていく力となって働くことに注意して、しっかりと見据えて行かねばいけないのです。（松山幸生先生は現実を直視されて、逃避されなかった。向かって行かれた。祈りながら）

そういう中で、この世的な力に馴染まないで生きていくためには抵抗があります。激しい戦いがあります。それを私たちは避けて通ることはできないのです。

「イエス・キリストは主である」ということは「イエス・キリストも主である」ということとは根本的に違うことをはっきりさせなければいけません。「イエス・キリストだけが主である」と言い切る時に「イエスは主なり」という信仰告白は成立するのです。

ところが私たちが「イエス・キリストは主である」と言っているその信仰告白の中に、時にはイエスによらなくても解決できる問題はあるのだ、というように自分たちが「但し書き」を付け加えたとすると、そんな福音もはや福音ではありません。もう「押し流された状態」なのだということになると思うのです。

その意味で1節の冒頭の言葉はとても大切なことだと思います。

「だから、私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます」

イエス・キリストが語られた言葉に全身全霊を傾けて一所懸命に聴き続けていかねばなりません。そうしないと救いは絵に描いた餅になってしまいます。力になりません。更に私たちにとって、それが救いにならないだけでなく、私たちを通してこの世の人々を救おうとしていらっしゃる神のご計画を頓挫させてしまうことにもなります。それは罪だということです。

ですから、私たちが選ばれた、救われたということは、私たちが「大きなこの救いの恵み」を、この世に分かち与える責任を付与された存在でもあるのだということ。

それゆえ、私たちがその船を操る時には、この世の人々を間違いなくキリスト・イエスによる救いに導くために、片時も気を緩めることなく、神の言葉を聴き、それに対して応答し続けていかなければなりません。そういうことだと思います。

第2章の1節から4節までは、短い箇所ですが、皆さんも色々お感じになっておられることが多くあるかと思いますが、ここはその意味でこれから先に述べようとしている事柄の序説的な意味で書かれている部分です。そのことを心に留めて味わって頂ければ幸いです。（1996年3月9日）

写者ご挨拶

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の転写は私自身の信仰の立て直しを目的として始めましたが、試み始めますとそれが「大それた試み」「身の上知らずの無謀な試み」であり、それには「鳥肌のたつ怖さ」を感じました。正確に転写することもままならず、信仰の弱さのみならず、聖書の常識にもこと欠く自分に直面しました。そこで、無知を恥とせず、厚かましくも松山幸生先生の奥様清子夫人に相談いたしましたところ、日本基督教団峽南教会牧師・森容子先生をご紹介いただきました。ご多忙の中、9月23日ご面談頂き、校正のみならず、教理の解説、あるべき立ち位置を、ご教授いただくことをお引き受けくださいました。今回4回目になりますが、私は次のように森容子先生に感謝のお手紙を出させていただきました。私信ではありますが、私の今の心情を率直に述べておりますので、ここに記し教友の皆さまにお知らせいたします。

今後も忠実な転写をいたします。この講述に参加された先輩諸兄姉の皆さま、「ヘブライ人への手紙に学ぶ」著をお持ちの皆さまには、時々転写に違いがあることに気づかれると存じます。カナ文字が漢字になっている等、ほんの少しの編集をさせていただきますことお許し頂きたく存じます。松山幸生先生の話される凜然とした雰囲気を保ち、その臨場から溢れるお力に応答してゆきたく存じます。1000頁に及ぶ大講述でございませう。皆さまのお祈りを頂き貫徹いたします。どうぞよろしく願いいたします。（おはらやすお記）

森容子先生

2021/10/08

主の聖名を讃美いたします。

先生、本当に有難うございませう。この貧しき者のために大いなるお助けを賜り御礼の言葉がありません。

一点一画見逃さず、相応しい括弧、句読点、私の数々の誤りを忍耐強く、お目通し頂いて、私の存在をしっかりと見守り、導き、励まし、お助け頂いておりますこと、真に光栄でございませう。

今、つくづく思いますことは、「大それたことを始めた」「身の上知らずの無謀な試み」であったこと。そして感じていますことは「恐ろしい」ことを試みようとしている。畏怖の観念がなさ過ぎたと反省しております。

もし、森先生なくば、結果は大変なことになるところでした。

もし、森先生なくば、この作業は誤謬に満ちたものとして読まれてしまう可能性がありました。それを思いますと鳥肌が立ちます。

単に写せばいいという軽い思いつきで始めようとしていました。

しかし、正確に写すこともできない貧しい力に直面して、このまま進めば、誤った松山幸生先生を描き出す恐ろしい行為となりました。「主をなみする」ことになってしまうところでした。

ただ、小さな私の良心が芽を出し、というよりは私の無知が「何が主をなみすることなのか」の一節に1カ月以上留めおいてくれたのです。無知を恥とせず、厚かましくも行動に

出て、松山清子夫人にお尋ねしたことが、全ての始まりでした。ご夫人のご紹介で森容子先生のご指導を賜ることができるようになりました。なんと大きな驚くべき邂逅です。このカイロスを与えてくださった主に感謝いたします。9月23日峽南教会を訪問させて頂きました折には、ご夫妻で長時間、暖かい雰囲気の中で主の御言葉を説き明かしてくださいました。

私は森先生の寛容と忍耐に感謝します。森先生の深い信仰、鋭い洞察力、優しさ溢れる牧会力、地域に親しまれ愛され伝道に力を注いでおられるお姿に尊仰しております。

森先生はご主人様とお二人で私の誤字脱字の粗稿を一文字一文字指で押さえて読んでくださっています。抜けることなくご指摘してくださいます。文の段落、括弧の形、「てにおは」の修正、主語の追加等の形式ばかりでなく、私が理解できていない神学的な知識の加筆、松山幸生先生が言葉にされていない行間の意味を「一言の単語」を挿入するだけで、納得できる文章に仕上げてくださいます。「一文字の導き」に驚嘆します。

聖書は見かけは易しそうに見えますが、説き明かしなくして理解できるものではありません。特にヘブライ人への手紙は新約聖書と旧約聖書の橋渡しをする書簡で、紀元1世紀頃のヘブライ人の文化慣習を理解していなければ読み進めない所が多くあります。

しかし、この書簡ほど繰り返し重畳的に「十字架と救い」について宣べているものはないように私には思えます。

牧師の導きが絶対に必要な書簡だと感じます。私は自分のよちよち歩きの信仰を立て直す決意をした、その時に松山幸生先生の「ヘブライ人への手紙に学ぶ」に出会いました。ひとりで読んでいけば、信仰が深まると思っておりましたが、あに図らんや「信」以前の「知」の貧しさに晒されることになりました。そして、無知のままに、すべてを受け容れくださる森先生の前に裸で新しい着物を求めて原稿を送りました。

地方における牧師の働きは牧会だけでなく、地域社会とのおつき合い、建物の保全修理、環境対策等のお仕事があり、多忙な日々であることは、私には分かっておりましたので、校正のお願いはできないと考えておりました。しかし、先生は喜んでお引き受けしてくださいました。私は先生がどれだけの時間をこの粗稿に費やされるか、ほぼ予想はできません。それ故に、申し訳なく、忝く、感謝の心で一杯でございます。

ご指導を無駄にせず、一回一回前に進み、先生ご夫妻のご負担を少なくすることに努めなければなりません。そのことを通して私の修業が遂行されると考えております。

ご迷惑は一杯お掛けすると存じますが、どうかこの貧しき信徒をお助けくださいますようお願い申し上げます。お励ましのお言葉、本当にありがとうございます。

先生ご夫妻の、そして教会の皆さまのご健勝をお祈りいたします。在主。

おはらやすお